

古事記から学ぶ
古事記に見る「天地創造」

宇宙の初め、天（あめ）も地（ち）もまだ渾沌とした時に、最初に三柱の神が、天の高いところ「高天原」に出現した。

- 天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）・・・天の中央にあって宇宙を統一する神
- 高御産巢日神（タカミムスビノカミ）・・・宇宙の生成を司る神
- 神産巢日神（カミムスビノカミ）・・・宇宙の生成を司る神

天と地のけじめがつかず形らしい形もない地上は、水に脂を浮かべたように漂い、あたかもクラゲが海を漂うような状況だった。そこに水辺の葦が芽吹いてくるように萌え上がっていくものがあり、そこから二柱の神が生まれた。

- 宇麻志阿斯訶備比古遲神（ウマシアシカビヒコヂノカミ）・・・男神
- 葦の芽が天を指す勢いを示す男神だった。次に生まれたのが

天神（あまつかみ）

- 天之常立神（アメノトコタチノカミ）

永遠無窮の「天」そのものを神格化した神である。

この最初に生まれた五柱の神は、地上に成った神とは別な、「天」の神「天神（あまつかみ）」である。

漂う脂のようなものの中から、生まれるべき「地」を神格化した神が出現した。

- 國之常立神（クニノトコタチノカミ）・・・生まれるべき地を神格化した神
- 豊雲野神（トヨクモノノカミ）

脂のようなものが次第に凝り固まり、広々とした沼のようになっていくことを示している。

次に現れたのは

- 宇比地邇神（ウヒヂニノカミ）という男神と、●須比智邇神（スヒヂニノカミ）という女神。

脂のように漂うものの中から潮と土が分かれ始めて、砂や泥が混じった沼となったことを示している。

次に、

- 角杙神（ツノグヒノカミ）・・・男神と、●活杙神（イクグヒノカミ）・・・女神。

沼地の泥が次第に固まり、春の芽吹きが育っていくことを示している。

- 意富斗能地神（オホトノヂノカミ）・・・男神

- 大斗乃弁神（オホトノベノカミ）・・・女神。

広やかな大地がここに固まったことを示している。

- 淤母陀琉神（オモダルノカミ）・・・男神

大地の面が不足なく整ったことを示し

- 阿夜訶志古泥神（アヤカシコネノカミ）・・・女神

この時に「あやにかしこし」とあげた悦びの声を神格化したもの。その次に現れたのが

- 伊邪那岐神（イザナギノカミ）・・・男神

- 伊邪那美神（イザナミノカミ）・・・女神。

ここまでを神世七代（かみよななよ）という。

神世七代（かみよななよ）

最初に生まれた三柱の神が、伊邪那岐神・伊邪那美神に命題を与えた。

「地上はまだ脂のように漂っているばかりだ。お前たちは人が住めるように作り上げよ」と命じて天沼矛（あめのぬぼこ）という玉飾りをほどこした美しい矛を授けた。

<長くなりそうな旅の始まりに>

各地を歩き、その歴史を調べたり、そこで出会った寺社や歴史的な遺構について掘り下げてみたりすると古事記・日本書紀の記述に辿り着くことが多い。

その都度該当する資料のその部分を索引検索したりすることが多い。いっそのこと一度古事記・日本書紀を読んでみようかなと思い始めた。

手に入れたのは、河出書房新社の「現代語訳 古事記」（福永武彦訳）。無事読破できるのか、心配ではあるが、第一ステップの整理として「天地開闢（宇宙の初め）」から「伊邪那岐神と伊邪那美神」までをまとめて見た。

<閑話休題>

古事記の冒頭を読み始めてすぐに、似たような文章を思い出した。

昭和46年頃に読んだ「旧約聖書」の「創世記」第一章の書き出しによく似た記述があった。

書架から引き出した、ややかび臭い「旧約聖書」を開いてみたら……。

はじめに神は天と地とを創造された。

地は形なくむなしく、やみが淵の表にあり、神の霊が水の表を覆っていた。

神は「光あれ」と言われた。すると光があった。神はその光を見て、良しとされた。神はその光とやみとを分けられた。神は光を昼と名付け、やみを夜と名付けられた。

タとなり、また朝となった。第一日である。

神はまた言われた。「水の間に大空があって、水と水とを分けよ」そのようになった。

神は大空を造って、大空の下の水と大空の上の水とを分けられた。神はその大空を天と名付けられた。タとなり、また朝となった。第二日である。

神はまた言われた。「天の下の水は一つ所に集まり、乾いた地が現れよ」そのようになった。

神はその乾いた地を陸と名付け、水の集まった所を海と名付けられた。神は見えて、良しとされた。

神はまた言われた。「地は青草と、種を持つ草と種類に従って種のある実をむすぶ果樹とを地の上にはえさせよ」そのようになった。地は青草と、種類に従って種を持つ草と、種類に従って種のある実を結ぶ木とを生えさせた。神は見えて良しとされた。タとなり、また朝となった。第三日である。

神はまた言われた。「天の大空に光があって、昼と夜とを分け、しるしのため、季節のため、日のため、年のためになり、天の大空にあって地を照らす光となれ」そのようになった。（以下省略）

<ふたたび古事記へ>

伊邪那岐命と伊邪那美命は、天と地の境にある天浮橋（あめのうきはし）の上に立ち、海の上の脂のように漂うものの中に天沼矛を突き刺して、掻き混ぜた。水は次第に塊になり、矛を抜き取ると先端から潮が落ち、やがて固まって島となった。できた島は淤能基呂島（おのごろじま）呼ぶが、「自然と凝り固まった島」という意味である。伊邪那岐命・伊邪那美命は天浮橋からこの島に降り、手ごろなところに柱を建て、そこに広い御殿を造った。

太い柱の右から伊邪那美命が、左から伊邪那岐命が廻り、行き会ったところで契りを結ぶことになっ

た。伊邪那美命が先に「あなにやしえおとこを（なんと見目麗しい人でしょう）」と感嘆し、次に伊邪那岐命が「あなにやしえおとめを（なんと見目麗しい乙女でしょう）」と感嘆した。伊邪那岐命は、「女の方が先にものを言ったのは良くないしるしだ」と小言を言いはしたが、そのままことは運んだ。

そして生まれたのは、骨のない蛭のような醜い子だったので、二人は葦船に入れて流してしまった。次に生まれたのは淡島、「軽んじて憎む」という意味からつけられた名前、御子としては数えない。二人は高天原に上がって天神に相談をした結果、「女の方が先に言葉を発したことが失敗の原因」と指摘された。

二人は淤能基呂島に戻り、神の指摘に従って男が先に言葉を発して、次に女が言葉を発して再び結ばれた。その結果、次々に国を産み出した。

最初に生まれたのが「淡路之穂之狭別島（あわじのほのさわけしま）」で、のちの淡路島を神格化したもの。次に「伊予之ニ名島（いよのふたなのしま）」で、のちの四国。山脈によって二並びに分かれているという意味である。この島は体がひとつなのに顔が四つあり、ひとつひとつの顔に名前がついている。

麗しい乙女を意味する「愛比売（えひめ）＝伊予」、飯（いい）を産する国を男性化した「飯依比古（イヒヨリヒコ）＝讃岐、粟を産する国を女性化した「大宜都比売（おおげつひめ）＝阿波」、雄々しき男子の「建依別（たけよりわけ）＝土佐」と言う。

次に生んだのが「隠岐之三子島（おぎのみつごのしま）」で、海原の沖合にある三つの島という意味で、別名を「天之忍許呂別（あめのおしころわけ）」と言う。（現在の隠岐の島）

次に筑紫の島（のちの九州）を生んだが、この島には顔が四つあった。

「白日別（しらびわけ）＝筑紫」、「豊日別（とよびわけ）＝豊（豊前・豊後）」、「建日向日豊久士泥別（たけひむかひとよくじひねわけ）＝肥（肥前・肥後）」、「建日別（たけびわけ）＝熊襲」。

次に生んだのが、「天比登都柱（あめのひとつばしら）＝伊伎（壱岐）」で離れ小島を意味する。

次に生んだのが、「天之狭手依比売（あめのさでよりひめ）＝津島」

次に生んだのが「佐度の島」で、その次に生んだのが、「大倭豊秋津島（おおやまととよあきつしま）＝本州」で、五穀の豊に実るところの意味がある。別名を「天御虚空豊秋津根別（あめのみそらとよあきづねわけ）」と言う。

ここまでの八つの島は総称して大八島（おおやしま）と呼ぶ。

伊邪那岐命と伊邪那美命は八つの島を生んだ後、淤能基呂島へ戻ったが、この間にさらに島を生んだ。「建日方別（たけひがたわけ）＝吉備の児島（現在の児島半島）」、「大野手比売（おおのでひめ）＝小豆島」、「大多麻流別（おおたまるわけ）＝大島」、「天一根（あめひとつね）＝女島（ひめじま）」、「天之忍男（あめのおしお）＝知訶島（ちかのしま・五島列島）」、「天両屋（あめのふたや）＝両児島（五島列島）」。

ここまでで国を生む仕事は終わり、今度は様々な神をいくつも生み出していくのだが、伊邪那美命は火を司る「火之野芸速男神（ひのやぎはやをのかみ）を生む時に女陰を焼かれて患いの床に就くことになってしまった。この神は別名を「火之炫毘古神（ひのかがびこのかみ）」または「火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ）」とも言う。

この時に伊邪那美命が嘔吐したものから、鉾山を司る「金山毘古神（かなやまびこのかみ）」、「金山毘売神（かなやまびめのかみ）」が生まれ、糞からは肥料を司る「波邇夜須毘古神（はにやすびこのかみ）」、「波邇夜須毘売神（はにやすびめのかみ）」が生まれ、尿からは、耕地を灌漑する水を司る「弥都波能売神（みつはのめのかみ）」、穀物の成育を司る「和久産巢日神（わくむすびのかみ）」が

生まれた。そして最後に生まれた御子は、「豊宇気毘売神(とようけびめのかみ)」で、多くの食物を司る神である。

そして、伊邪那美命は火の神を生む時に受けた傷がもとで黄泉国へ旅立った。

伊邪那岐命と伊邪那美命が生み出した島のは数は14、神の数は35を数える結果となったが、前述の蛭子と淡島はこの数には含まれない。

この後、伊邪那岐命は悲嘆にくれて、妻の死の元となった火の神を殺し、妻との再会を求めて黄泉の国を訪れたり物語は進んでいく。

表：伊邪那岐命と伊邪那美命が生み出した島

誕生の順番	生まれた島	現在の地理
1	淡路之穂之狭別島	淡路島
2	伊予之三名島	四国(伊予・讃岐・阿波・土佐)
3	隠伎之三子島	隠岐の島
4	筑紫の島	筑紫・豊前/豊後・肥前/肥後・熊本
5	天比登都柱	壱岐
6	天之狭手依比売	津島
7	佐度の島	佐渡
8	大倭豊秋津島	本州
9	建日方別	児島半島(岡山)
10	大野手比売	小豆島
11	大多麻流別	大島(特定できていない)
12	天一根	姫島
13	天之忍男	値鹿島(五島列島)
14	天両屋	両児島(五島列島)

<古事記読み始め雑感>

古事記は和銅5年(712年)太安万侶によって編纂されて元明天皇に献上されたと言われている。拙文の中に比較文書として旧約聖書を引用したが、旧約聖書は原型が書かれたのは紀元前と言われている。

旧約聖書も古事記も序章で、天地が創造されて、人が生まれて、出来上がってきた過程を書いている。双方の書が書き記していることに類似点があることと、その微妙な表現の違いが面白い。

しかし、古事記が書かれた時代に、旧約聖書(またはそれにまつわる情報)が日本に入ってきてはいないと思うので、旧約聖書を参照・参考にして古事記が書かれたとは考えにくい。

まずは450ページほどの本の内、87ページまで進んだところで一休みして整理して見た。

ここから先、どこまで読み進むことができるかわからないが、毎日少しずつ、少しずつ。

以上